

診 断

再生の可能性を判断するには、先ず、基礎廻りの湿気、白蟻等の被害調査、又、材の程度から家の価値を推測し、屋根の状況、瓦のズレや耐用年数を考慮して判断します。内部は、柱の沈下や垂直性等を確認し、施主の希望に対して、どの程度の事が出来るか判断します。診断の難しい所は、施主の経済的・納期的な面から、その状況に応じた判断が必要となることです。その為に、チェックリストの整備、再生建物の見積りの為のソフトの開発等が求められます。

調 査 & 実 測

現況実測調査は、一回で完全に完了し、図面まで起こすことはまれなので、デジカメ等にて、詳細に記録します。周辺の環境も含めて、記録に残し、調査のやり方の社内基準を整備し、詳細に野帳に記録することが求められます。

平 面 & 断面計画

再生は、古い民家を住居として再生する場合と、住宅以外に再生する場合があります。

住宅にする場合は、古い民家の使い勝手を改善したいと言う要求が特に多く見られます。この様に、住み手からの要求を限られた予算内で可能にする為にも、設計は自社スタッフだけでなく、外部の多様な人材を活用することも必要でしょう。

解 体

撤去計画—民家は初めに「構造ありき」であり、その構造特性を生かせる様、解体し、番付に留意して、運搬あるいは保存します。



瓦

古来、瓦は、低カロリーの燃料で長い時間をかけて焼成していました。その土と形、温度がうまく調整できたものの中には、千年以上もの年月に耐えてきたものもあります。

現在は、ガスなどカロリーの高い燃料を使用し短時間で焼かれており、その強度は三百年もてばという状態です。

室町時代以後、見た目の美しさを求めるあまり、強度をおとすようになりました。

従って、よき瓦は可能な限り再利用を念頭に、常にストックを怠らないようにすると共に、やむを得ず産業廃棄物として処分をしなければいけない古瓦の利用などを研究開発し、新分野に進出することも有効ではないでしょうか。



建 具

建具は、空間を構成する重要な要素の一つです。種類も大きく分類しても、障子戸を筆頭に舞良戸、ふすま、板戸、帯戸など多様で、そのそれぞれの中に、地域、職種に見合ったデザインの戸が数え切れないほどあります。

御社においても多くの建具をストックされていますが、今以上にストック場所、ストック量を増やし、再利用に対応する必要があります。

格子の隙間から差し込む光、障子を通した心地よい光のゆらぎなど、伝統的なものは光の幻想を私たちに与えてくれます。

空間を引き締めてくれる舞良戸、部屋の雰囲気や和紙一つで変えてくれる襖戸などを個別で販売も出来るようになれば、自然に古建具も容易に入手でき、会社の知名度、情報収集力もより向上することでしょう。

土



土は、世界中の住居に今でも使用されている大事な材料です。日本においても梅雨時は湿気を吸い、乾燥時にはその湿気を吐き出してくれる保温材と呼べるほど有効なものでした。

現在は化学系の保温材や、筋交いの利便性におされ随分、土壁工法は衰退していますが、健康のことを考えれば、行き着く先は土壁となります。

土壁の材料には解体家屋の瓦の葺き土を丁寧に残し、よく寝かした新しい土と適度な砂を混合し使用すると良いでしょう。

仕上げ材

仕上げ塗りには石灰系の塗り材が健康によく且つリーズナブルに利用出来ます。

只、下地が土壁の場合は十分に下地の乾燥に注意し、柱際にはひげこ等を使用し、隙間対策を十分にとるべきでしょう。

割れ対策として、麻スサや藁スサなどはやや多めに入れておくとよいでしょう。もちろん化学繊維のスサも代用が可能ですが、成分に注意する必要があります。

最近、珪藻土仕上げが人気ですが、混入量が多すぎると、劣化を促し保水性が良すぎるため、乾燥が遅れて色むらや白華になり易くなります。

外部に漆喰仕上げを施す場合は、現場調合が既調合漆喰より耐久性があるので、割高ではあるが海草糊をにて本漆喰仕上げとしたい。

塗装

日本には漆、柿渋、べんがら等、自然系の塗料が数多くあります。

外部については、自然系の現代塗料と古来の素材を混ぜて使用すれば強度が増し対候性はアップします。

内部は予算が許せば漆塗りを、厳しいときにはべんがらと墨を混ぜ、上から鯨油、桐油等で。

其の他、柿渋仕上げも年月とともに深みを増してくれます。

最近は漆や、柿渋を浸透させた木材も販売されており、自然系の欠点である乾燥時間の問題をクリア出来るようになったので、出来る限り現場での作業の省力化のためにも新素材を利用すべきと思われます。